

～輝きの子育て～

コロナウイルス第二波は襲来する？ 歴史から学ぶ

緊急事態宣言が解除され、誰もが一息つくという気持ちになったことと思います。しかし新型コロナの流行は今後どうなるのか？歴史の経験から“終息までのロードマップ”のイメージを考える過去の感染症の歴史に触れた文章が掲載されていました。引用、要約し掲載させていただきます。

新型＝未知のウイルスである以上、感染が危険で「ワクチン」のない状況下では、「ヒト同士の接触の抑制」以外に方策はありません。ですから「外出・営業自粛」や「在宅勤務」が極めて重要であることは何度強調しても過ぎることはありません。このタイプの感染症のパンデミックは、歴史上、スペイン風邪などもそうですが、一つの波の期間は長くても六ヶ月で、猛烈な感染ピークの期間は二か月～四か月です。日本で本格的な感染拡大が始まったのは三月下旬です。五月末に感染が減っても警戒が必要です。

米国のアレルギー感染症研究所も関わった研究では、「気温22度、湿度50%以上になるとウイルスの活動が収まる」との報告もあり、夏場に向けて現在の流行はいったん下火になるでしょう。問題は後に「第二波」がやってくる可能性です。「致死率は低くとも感染力が強く一気に大規模に拡がる」という感染症としての特徴は100年前の「スペイン風邪（当時の新型インフルエンザ）」のパンデミックと似ています。スペイン風邪は終息まで約2年かかり、その間、三つの流行の波が襲来しました。

「第一波」（春の先触れ）は、1918年5月から7月頃まで。

「第二波」（前流行）は、1918年10月から翌年5月頃まで。

「第三波」（後流行）は、1919年12月から翌年5月頃まで。

すると、今回も「また10月から12月あたりに第二波が始まって、来年春先まで続くかもしれない」と警戒する必要があります。「高温・湿潤」より「低温・乾燥」の方が、ウイルスの感染効率が高まるからです。新型ウイルスのパンデミックは、しばしば「第二波」「第三波」が生じます。ウイルスが変異したり、他地域から繰り返し感染が持ち込まれ、人口の大部分が免疫（＝「集団免疫」）を得るまで流行するからです。しかもスペイン風邪のように、変異によって致死率が高まることもあります。

スペイン風邪の「第一波（春の先触れ）」では、最初の流行であるため、広く多勢が感染したと考えられます。ただし死者はほとんど出ていません。ところが1918年10月頃からの「第二波（前流行）」では、ウイルスが変異して致死率が高まり、26万人もの死者がでました。特に11月から猛威を振るい、翌年1月に死者が集中しました。そして1919年12月からの「第三波（後流行）」でも18・7万人もの死者がでました。「第二波」よりも感染者は少なかったのですが、致死率が高まり（約5%）、多くの死者がでたのです。これは100年前のスペイン風邪の報告です。人間がウイルスより優勢なのは天然痘とポリオぐらいです。「集団免疫」を獲得するまで何度かの流行の波に襲われます。ですから、「ワクチンを開発し、これで集団免疫を得る」というのが、我々の“ゴール”となります。しかし「ワクチン開発」には、通常一年半から二年ほどかかります。現在、「早くても来年初め」と見られています。すると「第二波」に「ワクチン」が間に合わない可能性もあります。そのため、どうしても自粛が必要になります。

「PCR検査」が「現在、ウイルスが体内にいるかを調べる検査」であるのに対して、「抗体検査」は「過去にウイルスに感染したことがあるか、ウイルスに抵抗する能力（免疫抗体）をすでに獲得しているかを調べる検査」です。「抗体検査」は「PCR検査」に比べてはるかに容易です。検体の自己採取も可能で、10～20分程度で結果が判明します。

新型コロナウイルスは、インフルエンザウイルス以上に“タフ”で体外でも三日間程“長生き”することもあり、物の表面などに付着して人体に入り込むので頻繁な消毒が必要でしょう。日常生活でも“転ばぬ先の杖”で「神経質だ」と笑われても予防の徹底が“安心感”を生み、経済活動の再起動を容易にするはずです。

片野 英子